

■東海散士 旧会津藩臣(白虎隊士)で、維新後渡米し財政学を学んで帰国も亡国の士となり、傑作政治小説「佳人之奇遇」を遺した。
とうかいさんし
ペリー来航・1853= 台場警備の出張先上総国富津の会津藩陣屋で、会津藩士柴佐多蔵繁吉と妻フジの第8子四男に生まれる。幼名は茂四郎。本名柴四朗で、のちに有名な陸軍大将になる柴五郎の実兄。
桜田門外変・1860= 7歳: 幼少期より病弱であったが、藩士子弟の通例に従い、
生麦事件・1862= 9歳: 藩主松平容保が京都守護職に就任した年、藩校日新館に入り、小笠原午橋・南摩綱紀に就いて漢学を修めるうち、文才が芽生え、大学部を経たのち、先に藩主のお供で上洛していた父のもとに上洛。
明治維新・1868=15歳: 鳥羽・伏見の戦いには父・兄とともに出陣、会津戦争では白虎隊に配属されたが、病のため籠城組となつて生き残った。祖母・母・兄嫁・姉妹ら女性5名は、足手纏いとなると私邸で自刃している。
戊辰戦争終・1869=16歳: 降伏開城後は諸士とともに猪苗代謹慎所、次いで東京の護国寺に移され、
初の日刊新聞1870=17歳: 赦免後、旧盛岡藩領内に新設の移封先斗南藩に一家で移住、藩設置の英学校に通つたが、まもなく上京。
廃藩置県・1871=18歳: 沼間守一の私塾で仏語を、山東直砥の北門社で英学を学び、横浜英国人の書生を経て斗南へ戻り、広沢安任
経営の牧場で英国人技師の通訳兼案内役として働き、実家では開墾に従事するも、修学の志やみがたく、
明治6年政変 1873=20歳: 転々とした後、再び上京。長兄太一郎の周旋で唐通事出身の横浜税関長柳谷謙太郎の書生となり、
初の民間工場1875=22歳: 援助をうけて3年間学業に専念しながら、
三つの反乱・1876=23歳: 〔東京日日〕に、「東洋美人の嘆」を寄稿するなど、言論活動にも手を染め始める。
西南戦争・1877=24歳: 西南戦争には、山田顕義少将率いる別働第二旅団(会津藩はじめ東北諸藩出身者を多く含む)に従軍、旅団
御用掛を務め、終戦後は同旅団の戦記編纂に従事、熊本鎮台司令官谷千城に見出され、
大久保暗殺・1878=25歳: 谷を通して豊川良平(岩崎弥太郎の従兄弟)の知遇を得、岩崎家の援助を受けて、
琉球処分・1879=26歳: *アメリカ渡航し、サンフランシスコ領事になっていた柳谷のもとに寄寓、岩崎家の意向で、パシフィック
・ビジネス・カレッジ(商業専門学校)に通い、保護主義を旨とする当時のアメリカ流の経済学を専修、
1880=27歳: ディプロマ(修了証書)を取得。この年大養毅・馬場辰猪らが創刊した三義系の『東海経済新報』に、アメリカの経済・景況や見聞記事を多数寄稿し、貿易論・外国船舶運輸論・鉄道論等を開陳していく。
明治14年政変1881=28歳: 東海岸へ移り、短期間ハーバード大学で経済学を学んだ後、フィラデルフィアへ移り、新設開校されたペ
ンシルベニア大学ウォートン校(全米初のビジネススクール)に特別生として入学、アイルランド出身の社会
科学教授ロバート・エリス・トンプソンに師事、
秩父事件・1884=31歳: 第一期卒業生として財務学士の学位を取得(論文「Taxation in Japan」は同校の政治科学年報創刊号に掲載さ
れる)し、アメリカ諸州及びメキシコを巡遊して、まさに、鹿鳴館の西洋かぶれの最中、帰国した。
内閣発足・1885=32歳: 保護貿易主義を標榜する学術団体(日本経済会)の創立に参加し、大養毅らとともに事務委員に選定され、上
流の者が遊楽に耽っているのに危機を覚え、*留学中から書きためてきたものをもとに、東海散士(亡国亡藩
の士の義)の筆名で、小説「佳人之奇遇」初編を発刊、自らをモデルに、スペイン・アイルランド・中国等の
亡国の遺臣らによる国権恢復への情熱と連帯を描いて、矢野龍溪「経国美談」、未広鉄腸「雪中梅」等とともに、
自由民権運動期の代表的な政治小説となって人気を博し、憂國の士がたちまち文壇の寵児になる。
帝国大学始・1886=33歳: 「佳人之奇遇」2,3編。これに甘んじず、犬養から日本に亡命中の金玉均・朴泳孝ら朝鮮国の開化派政治家を
紹介されて、彼らと東亜の将来を論じたりするうち、柳谷とともに、初代農商務大臣になった谷千城の秘書
官に任命され、そのヨーロッパ視察の随行、諸国を歴訪し、長期滞在したウイーンでは、かつて伊藤博文も
師事した法学者シュタインの私邸で、日本の内政・外交問題を含め計34回の講義・質疑。途中寄航した英領
セイロン島では流刑中のエジプトの軍人革命家オラービー、イタリアではハンガリーの亡命革命家コシュートと面会し、後に「佳人之奇遇」続編に彼らを登場させることになる。
国民之友始・1887=34歳: 井上馨外相が交渉をすすめていた条約改正案に、谷大臣が反対意見書を提出して辞職するのに従い辞表を
提出、当時から、谷が提出した意見書の起草者とみられていたという。
初の対等条約1888=35歳: 当時獄中にあった郷里の先輩の民権功績を称える「河野磐州傳」を書き、「東洋美人の嘆」を政治小説化した「
東洋之佳人」、「佳人之奇遇」4編巻までを出版。〔大阪日報〕の救済を頼まれ〔大阪毎日〕と改題して続刊する
一方、後藤象二郎による大同団結運動に参加、新たな民党を創ろうとするも、谷が動かず挫折。〔経世評論〕
誌を創刊して活発な言論・政治活動するも、売上部数が低下して出資者の反発を買ひ、事実上更迭。
帝国憲法発布1889=36歳: 自家版「埃及近世史」。谷らを中心に陸羯南が主筆になって発刊された日刊紙(日本)の社友になり、
帝国議会始・1890=37歳: オスマン帝国より美治憲慈(メジジエ)第三等勳章。議会総選挙が始まるや出馬しようとして挫折、
足尾鉱毒始・1891=38歳: 広沢牧老人遺稿: 経済問題に付要旨を述べる」を編集刊行し、「佳人之奇遇」5編を出版。国家経済会や、
大本教・1892=39歳: 東邦協会創設に参加し、第2回総選挙で福島県第4区から立候補し初当選、壇上で獅子吼する闘将と言うよ
りも、議会外での駆け引きやとりとめが得意な、地味な黒幕、影の指南役として人望があり、以後、25年
にわたって、11回当選・2回落選、合從連衡で出現する多くの政党や会派の幹部を務めていくことになる。
郡司千島探検1893=40歳: 〔二六新報〕にも社友として署名記事。殖民協会等に参加の一方、朝鮮の内政にも深く関心を寄せ続け、
日清戦争始・1894=41歳: 韓国に戻った朴泳孝を支援し、
日清戦争終・1895=42歳: 鉄道会議議員。韓国内の内務大臣となった朴に面会するために代議士佐々友房とともに渡韓。まもなく、谷
の推薦で、駐韓特命全権公使として着任した三浦梧楼の顧問になり、再び渡韓するが、三浦らが漢城で惹き
起こした乙未事変(閔妃暗殺事件)により退韓。事件に関与した嫌疑で広島監獄署に勾留されたが、
白馬会・1896=43歳: 関係自体が証拠不十分とされ他の被告とともに予審免訴となつた。
八幡製鉄始・1897=44歳: 6年間途絶していた*「佳人之奇遇」8編まで一挙に刊行、最終16巻では、金玉均の暗殺から東学党の乱・日清
戦争・閔妃暗殺に至る経緯を描いて、日本政府の対朝鮮政策の優柔不断・軟弱外交を批判した。
子規句歌革新1898=45歳: 限板内閣の農商務次官、
Bushidou・1899=46歳: 軍事費拡大に伴う増税反対派の重鎮として大運動をし、近衛篤麿が中心になって、帝政ロシアの脅威に対する
「支那保全論」を唱えて〔国民同盟会〕を結成されるのに尽力、
ヒアノ国産化・1900=47歳: 山川健次郎・今泉六郎らとともに〔会津図書館共立会〕を設立し、会津若松に図書館を建設する運動を展開、
最も多い蔵書790冊を寄贈している。北清事変が勃発、公使館付武官であった実弟柴五郎砲兵中佐が北京籠
城戦で活躍し世界に知られるようになったが、終結後、竹内正志代議士とともに渡清し実況を観察、
田中正造直訴1901=48歳: 水田新太郎の次男守明を養嗣子として迎え、
日比谷公園・1903=50歳: 第8回衆議院議員総選挙で落選すると、対ロシア主戦論の立場から、未来小説「日露戦争 羽川六郎」を執筆
刊行、旧会津藩士羽川六郎なる架空人物の自伝という体裁で、北清事変から日露開戦、日本の勝利と日米英
による万国平和会議開催までを描き、最後の出版になったが、
日露戦争始・1904=51歳: 若松市立会津図書館として開館した。
日露戦争終・1905=52歳: 日本が勝利する現実を予告することになり、戦後、勲四等旭日小授章、
満鉄発足・1906=53歳: 佐々友房とともに大同俱楽部を起こすも、次第に政界から離れて、農業を楽しむようになり、
韓国反日暴動1907=54歳: フラギ創刊。1908=55歳: 東洋拓殖株式会社設立委員、教科用図書調査委員会委員、
伊藤博文暗殺1909=56歳: 深川芸者であったとされるキクと婚姻、キクにも養子庄作がおり、ともに入籍した。
韓国併合・1910=57歳: 議院建築準備委員会委員、
大逆事件判決1911=58歳: 広軌鉄道改築準備委員会委員、
明治天皇没・1912=59歳: 21ヶ条要求・1915=62歳: 翌年にかけて、第2次大隈内閣の外務大臣石井菊次郎の下に外務参政官を最後に引退、
民本主義・1916=63歳: 勲三等旭日中綬章を授かり、悠々自適の生活を送るうち、
原敬首相暗殺1921=68歳: 中風になり、
水平社結成・1922=69歳: 療養中だった熱海の別邸で脳溢血により没した。
名作「佳人之奇遇」の作家として喧伝されたわりに立身出世しなかったのは、その才があまりに豊かで、その
夢があまりに大き過ぎたためであり、大同団結運動をしていた時が得意の絶頂であったと言えよう。